



Title	Study on the Functions of Protein Phosphatase PPM1D in Myeloid Innate Immunity [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	工藤, 風樹
Citation	北海道大学. 博士(理学) 甲第14005号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/78061">http://hdl.handle.net/2115/78061</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Fuki_KUDOH_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（理学） 氏名 工藤 風樹

## 学位論文題名

Study on the Functions of Protein Phosphatase PPM1D in Myeloid Innate Immunity  
(骨髄系細胞による自然免疫におけるプロテインホスファターゼ PPM1D の機能に関する研究)

自然免疫応答は、体細胞における感染・損傷の検知および免疫系の惹起と、自然免疫細胞による異物の排除および獲得免疫の惹起によって構成される。好中球は、ヒト血中白血球において最も多く存在する自然免疫担当細胞である。急性骨髄性白血病（AML）は、好中球前駆細胞における変異により生じる疾患であり重篤な免疫不全を引き起こす。好中球による癌細胞に対する効果は腫瘍抑制的効果と腫瘍促進的効果の両面が存在し、この二面性は好中球に機能の異なるサブセットにより生じる。免疫抑制的なサブセットである PMN-MDSC は、T 細胞の増殖抑制能を示し、がん免疫を抑制し腫瘍発達に寄与することが報告されている。このため、より効果的ながん免疫療法の確立には、骨髄系細胞の機能制御が肝要である。

Ser/Thr ホスファターゼ PPM1D は、当初野生型 p53 誘導性ホスファターゼとして同定され、p53 の負の調節因子であり p53 経路の不活化による細胞癌化を引き起こす癌原遺伝子であるとみなされてきた。一方で、ノックアウトマウスの解析および当研究室でのこれまでの知見から、PPM1D が白血球特異的な機能を有すること、特に好中球分化に関与することが示唆されている。

そこで本研究では、骨髄系細胞による自然免疫におけるプロテインホスファターゼ PPM1D の機能探索のため、(1) PPM1D 阻害によるヒト AML 由来細胞株の分化状態に与える効果および(2) PPM1D 阻害による PMN-MDSC への分極化誘導を解析し、そのメカニズムに関する研究を実施した。

本論文は、全4章より構成されている。第一章では総括的序論として研究背景及び目的を述べている。

第二章では、好中球分化モデル細胞である HL-60 に対する、プロテインホスファターゼ PPM1D の薬理的阻害による分化誘導の効果を解析した。HL-60 細胞は、All-trans レチノイン酸 (ATRA) の添加により好中球様の表現型、すなわち核分葉を示し、CD11b 発現亢進、そして NBT 還元能を獲得する。はじめに ATRA 添加した HL-60 細胞における PPM1D 発現解析を実施した。定量的 RT-PCR および Western blotting によって、PPM1D の発現量が好中球分化に伴い、増加することを示した。HL-60 細胞が、p53 が欠損している細胞株であることから PPM1D の上流転写因子を明らかにするために、ChIP-seq データベースを用いた網羅的解析を行った。この結果、PPM1D Exon 1 周辺配列に結合する 100 以上の

転写因子が同定された。この中には C/EBP family, RUNX1 などが含まれており、分化段階に応じた転写制御が行われていることが示唆された。分化前後における細胞内局在を解析したところ、分化前は細胞核、特に核小体に強くする一方で、分化後の HL-60 細胞では細胞質にも存在することが示された。この結果は分化前後で異なる機能を有することを示唆している。次に、TAP-4PH が生細胞形態の可視化が可能な蛍光プローブであることを示し、これを用いて PPM1D 阻害による分化誘導の解析を実施した。阻害剤添加した HL-60 細胞において、細胞核が分かれる核分葉が観察された。一方で、マクロファージ様細胞は見られなかった。この結果から、PPM1D 阻害が骨髄分化を促進するが、マクロファージ様への分化は誘導しないことが明らかとなった。加えて、TAP-4PH が HL-60 細胞の細胞形態を可視化する上で非常に有用なツールであることを示した。さらに詳細な解析のため、分化マーカーである表面抗原 CD11b と NBT 還元試験による解析を実施した。これらの解析から TAP-4PH を用いた解析と同様に、PPM1D の阻害によって HL-60 が好中球様細胞に分化したことが示された。

第三章では、PPM1D 阻害した HL-60 細胞が免疫抑制的なサブタイプへと分極化していることを見出した。PPM1D 阻害 HL-60 細胞において、敗血症ショックを与えた際の炎症性サイトカイン産生の亢進が見られた一方で、炎症に伴うアポトーシスが誘導されないことが明らかとなった。これは、重度の炎症時の好中球でみられる好中球アポトーシスの遅延に類似した表現型であると考えられる。次に、IgG 依存的な貪食能の解析を実施し、分化誘導の効率を PPM1D 阻害 HL-60 のほうが高いにもかかわらず、貪食能は低下することを示した。これらの結果から、PPM1D 阻害 HL-60 における異なるサブセットへの分極化が示唆された。このため、PMN-MDSC としての機能解析のため、T 細胞モデル細胞との共培養を行った。ATRA により分化誘導した HL-60 との共培養では T 細胞増殖抑制は見られなかった一方で、PPM1D 阻害 HL-60 では増殖抑制が見られた。次に、ヒト肺がん細胞との共培養を実施した結果、ATRA 分化誘導 HL-60 は肺がん細胞の細胞数を顕著に低下させるが、PPM1D 阻害細胞ではその効果は大きく減少することが示された。以上の結果より、PPM1D 阻害 HL-60 が、PMN-MDSC 様のサブセットへと分極化していることが明らかとした。さらに、PMN-MDSC の免疫抑制能に必要であることが報告されている Prostaglandin E<sub>2</sub> 産生量を解析したところ、大変興味深いことに PPM1D 阻害 HL-60 細胞では、ATRA 単独分化誘導細胞と比較して、アラキドン酸カスケードの最終生成物 PGE<sub>2</sub> が 15 倍以上も産生されることが明らかとなった。PGE<sub>2</sub> の合成酵素である COX-2/mPGES-1 発現量は、PPM1D 阻害により有意に増加していた。加えて、細胞内脂肪量も増加しており、脂肪滴タンパク質の発現量も増加していた。これらの結果から、PPM1D 阻害 HL-60 細胞において、脂肪滴形成およびアラキドン酸代謝酵素の発現亢進によって PGE<sub>2</sub> 産生が亢進し、PMN-MDSC への分極化が起こったことが示唆された。さらに、PMN-MDSC 様細胞の転写的なバックグラウンドを明らかとするために、Transcriptome 解析を行い、PPM1D 阻害による MDSC への分極化は転写レベルでの変化を起こしていることが明らかとなった。

以上、本研究により、PPM1D 阻害剤による AML 細胞の好中球への分化促進剤としての有用性を示し、さらに PPM1D 発現低下による COX-2/mPGES-1/PGE<sub>2</sub> カスケード亢進を介した PMN-MDSC 分極化モデルを提案した。これら成果は、PPM1D を分子標的とするがん治療だけではなく、自然免疫細胞の強化によるがん免疫療法の効率化に大いに貢献することが期待される。